

墓じまい、無縁墓、合葬墓、散骨……。お墓のあり方の変化を示す言葉をこのところよく見聞きする。

背景にあるのは、少子化、過疎化、非婚化、単身世帯の増加など。

東京生まれで、地方に先祖代々のお墓があるわけではない私にとっても、ひとごとではない。

そうした変化は日本に特有の問題かと思っていたら、今週、あつと驚くニュースを欧米メディアが伝えていた。



人体をコンポストに

米ワシントン州が全米で初めて、「遺体をコンポスト（堆肥）の方法として登場したという。

にする」とを合法化し、知事が法律に署名したというのだ。

施行は来年5月。いったい、どういうことなのだろう。

米国では通常、遺体を保存処理してひつぎに入れて埋葬するか、火葬にするかのいずれか。コンポ

スト化はそのどちらでもない第3の方法として登場したという。

提唱者として紹介されているのは、シアトルで「リコンポーズ」

という会社を設立したカトリナ・スピードさん。彼女の講演動画

やプレスリリースなどを見ると、こういうことらしい。

医者一家に育ったスピードさん

は専門学校でデザインを学ぶが、自身の死後が気になり始める。祖母の時代には「火葬にする」と言ったら驚かれたが、その後、埋葬

スペースの不足や簡便さなどから火葬が増加した。

スピードさんもそれが環境にとってよい方法だと思っていたが、

よく考えると、二酸化炭素の増加につながる。本来、土に戻るはず

の有機物も失われる。そこで考えたのが、自然のプロ

セスを利用して体を土に返すこ

と。短期間で微生物に分解してもらおうというアイデアだ。実現性を確認するため、ワシントン州立

大学との共同研究で献体された6人の体を使った試験も実施した。

コンテナに入れてわらや木材チップなどで覆うと、4週間ほどで

分解され、堆肥となり、土となるという。この土を持ち帰れば、花

も樹木も果物も育てられる、というわけだ。

確かに、生物が循環する自然の摂理にかなった方法かもしれない

い。土に返り、新たな生命を育てると思えば、受け入れられやすいとも考えられる。一方で、反発する人がいるのもわかる。

では、日本だったら？ スピードさんにメールでたずねると「日

本の文化にもふさわしいのでは？ もちろん、人々の感じ方次第だ

けど」。宗教や文化だけでなく、科学や環境の観点からお墓を考

える。そんなきっかけになるかもしれない。

（専門編集委員）

記士 do-ki

青野 由利